



学校通信

平成31年4月26日
東京都立葛飾盲学校長
田島 忍
(第2号)

風薫る季節の始まり（平成から令和の時代へ）

副校長 大野 哲也

平成31年度がスタートして3週間が経ちました。幼稚部2名、中学部4名の新入生は、葛飾盲学校の生活に慣れてきたことでしょうか。先輩幼児・児童・生徒も自分が進級した上級学年が板についてきたところではないでしょうか。

さて、「平成の時代」もあと4日で終わります。そして新緑の季節、さわやかな風とともに5月1日からは「令和の時代」が始まります。子供たち一人一人にとっては日常の学習や生活を積み重ねている中の一つの出来事であり、急に何かが変わることはないでしょう。しかし、時代を一つのまとまりとして捉えたならば、「平成の時代」は世の中の変化のスピードが速まった激動の時代のように感じています。

視覚障害者にとって、平成における大きな変化(変革といってもよいか)の一つに、ICT (Information and Communication Technology=情報通信技術)機器の普及・発達があります。歴史をひも解くと、日本で最初に「IBTU」という画面読み上げソフトが開発されたのが昭和57(1983)年、その後昭和の時代にMS-DOSというコンピュータのOSに合わせたいくつかのソフトを経て、平成8(1996)年にWindowsに対応するスクリーンリーダーが世に出てからはインターネット、メールの普及とともに視覚障害者のコミュニケーション手段として大きな進化を続けています。

携帯電話も、「〇〇ホン」の大ヒットから、今ではタブレット端末を音声操作により自由自在に扱い世界中とつながっている全盲の方も大勢います。更に、DAISY図書などの録音や音声機器、点字ディスプレイなどの点字出力装置(携帯型の進化が著しい)の普及も急速に広まり、また、進化を続けています。

とかく「視覚障害者は情報障害者」と言われている部分もありますが、このような様々なICT機器をとおして、世の中にあふれるたくさんの情報にアクセスしたり、遠くにいてもいろいろな人とつながったりできる世の中になったのが、まさに「平成の時代」ではないでしょうか。もちろんこれは視覚障害者に限ったことではなく、多くの人にとって同じような変化のあった時代です。

「令和の時代」にはAIやロボットの普及でますます変化が大きくなることが予想されます。私事ですが、先日、世界的な全盲のピアニストがアメリカの室内オーケストラと、互いに触発して高めあう感動的な音楽会に行きました。人と人が直接共に一つのものを作り上げる時間。これは最新のテクノロジーが進化しても、変わらぬ貴重な行為だと考えます。日常生活においても、人と人が共に協力して活動することを「令和の時代」にも大切にしていきたいです。